

日本のオペラ公演2017

—公演データの分析とその考察—

昭和音楽大学オペラ研究所・石田麻子

1. はじめに

本オペラ年鑑では、日本のオペラ公演にテーマを定めたデータ収集を続けている。1995年版から2017年版に至るまで行ってきた調査の継続性により、文化的インフラと言えるべきものに育ちつつある。この特色とデータの柔軟な活用を可能にするため、分析の手法は極力変えず、経年変化の観察が可能な方法をとるようにしている。

では、2017年はどんな年だったのだろうか。オペラ公演データの分析を通じて、今の日本の文化を取り巻く環境を見てみよう。

1-1. A表（大規模会場での公演）とB表（中・小規模会場での公演）、C表（演奏会形式等の公演）の区分【表1】

本項では、全幕実施されたオペラ公演のうち、756席以上の大規模会場での公演をA表に、756席未満の中・小規模会場での公演をB表に、それぞれ区分している。区分の基準は大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスの座席数である。同劇場は、オペラ劇場としての機能を備えていて、一定規模のオペラ公演を実施することが可能となっている。そのため、編纂委員会において、大型のオペラ公演と中・小規模の公演とを便宜的に分ける座席数の目安として採用した数字である。

また、学校公演は、オペラ公演や演奏会開

催を主目的としない体育館などを使って行われることが多く、生徒たちのための公演となることがほとんどで、一般の観客に開かれた場とはなりにくい。そのため、生徒数や座席数にかかわらず、中・小規模公演に分類している。

さらに、演奏会形式・ハイライト公演など、通常の上演形式とは異なる公演形態のものをC表として巻末に掲載している。公演分析は、「6. 演奏会形式など」の項で行った。

1-2. 国内団体、教育研究団体、海外団体の分類について

（分類手法について）

オペラ団体の公演、劇場・音楽堂等による公演、大学等の教育機関の学生等が自主的に行う公演、団体や劇場間の共同制作公演等は「国内団体公演」に、大学主催の教育研究発表を目的とした公演、団体や劇場・音楽堂等の運営する研修所等の発表公演は「教育研究団体公演」に、海外の歌劇場や音楽祭等の来日公演は「海外団体公演」に分類している。

この分類を適用すると、「国内団体」の研修所公演は、「教育研究団体」になる。例えば、新国立劇場による公演は「国内団体」で、新国立劇場研修所公演は「教育研究団体」である。「教育研究団体」は、教育機関としての活動継続性を重視している。そのため、劇場・

表1 分析対象と上演団体の区分（○は本稿での分析対象、×は対象とせず、巻末に公演表を掲載）

	1. 国内団体	2. 教育研究団体	3. 海外団体
A表：大規模会場公演＝756席以上の客席数	○	○	○
B表：中・小規模会場公演＝756席未満の客席数	○	○	○
C表：演奏会形式等	分析記事のみ（6. 演奏会形式など）		

音楽堂等やオペラ団体等が、公募などで若手を集めて実施した教育プロジェクト等は「国内団体」に分類した。

(団体数について)

一つの団体が他団体と共同制作などを実施した公演は、その団体が単独で実施した公演とは区別し、別団体として数えている。同じホールであっても協働先が変わり、制作体制が異なる場合も、別組織として数えている。

例えば、東京二期会による《ばらの騎士》は、(公財)東京二期会、(公財)愛知県文化振興事業団(愛知県芸術劇場)、(公財)東京都歴史文化財団(東京文化会館)、(公財)大分県芸術文化スポーツ振興財団(iichiko 総合文化センター)、(公財)読売日本交響楽団、(公財)名古屋フィルハーモニー交響楽団による共同制作公演となった。同じく、東京二期会による《魔笛》は、一部の組織は重なっているものの、神奈川県民ホール((公財)神奈川芸術文化財団)、iichiko 総合文化センター((公財)大分県芸術文化スポーツ振興財団)、(公財)東京二期会、(公財)神奈川フィルハーモニー管弦楽団による共同制作であった(上記、団体名表記は、公演資料のママ)。これら2つの公演は、東京二期会が中心とな

りながらも、協働した組織が異なる。そのため、2つの演目実施団体は、別の組織として団体数に計上している。

この考え方は、複数の、形態の異なる組織がプロジェクトを組んで、新たな組織間連携を生んでいる状況を数字で表そうとしたことによる。このようにプロダクションごとに、複数の組織による共同制作プロジェクトが編成される動きは、例年のこととして定着する傾向にある。

2. 日本のオペラ公演2017年

2-1. 総上演回数と活動団体数の推移【図1、表2、図2】

2017年は、分析対象であるA表とB表をあわせた総上演回数が1,064回となった。2015年の1,125回、2016年の1,100回からさらに減少している。総上演回数は、ほぼ1,100回前後で推移しているとは考えられるものの微減傾向にあるとも言える。また、2015年に上演活動を行った団体数は273団体、2016年には323団体となっていたが、2017年は248団体と一気に減少した。

大規模会場での公演は、2015年の505回から2016年に463回へと減り、2017年は430回とさらに減少している。中・小規模会場

図1 総上演回数と活動団体数の推移

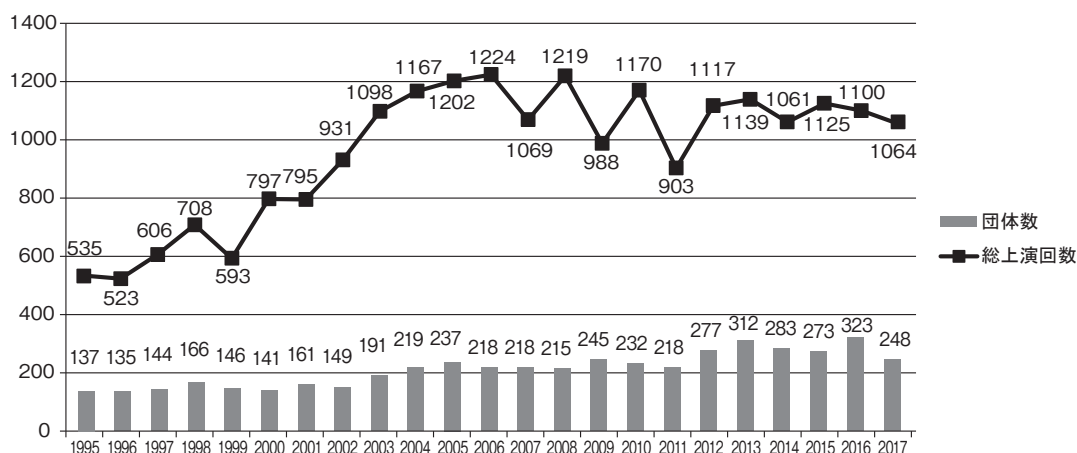
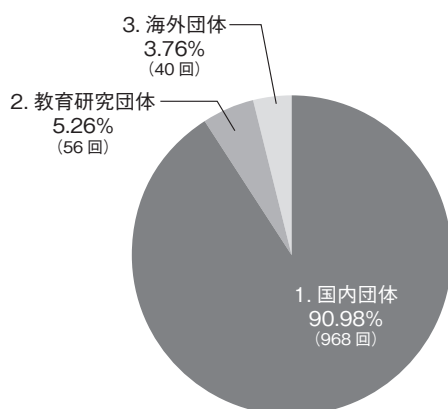


表2 2017年のカテゴリー別オペラ上演団体活動状況一覧

A. 大規模会場（756席以上）			B. 中・小規模会場（756席未満）			合計（A+B）		
カテゴリー	団体数	総上演回数	カテゴリー	団体数	総上演回数	カテゴリー	団体数*	総上演回数
1.国内団体	96	370	1.国内団体	156	598	1.国内団体	218	968
2.教育研究団体	10	20	2.教育研究団体	15	36	2.教育研究団体	23	56
3.海外団体	7	40	3.海外団体	0	0	3.海外団体	7	40
合計/総団体数・総上演回数	113	430/1064	合計/総団体数・総上演回数	171	634/1064	合計	248	1064

*団体数の合計は、A表とB表をあわせて再度集計したもの。同一の団体が規模の異なる会場で公演した場合もあるため、A表とB表を合計した数よりも少なくなる。

図2 各カテゴリーの総上演回数が全体に占める割合



は、2015年の620回から2016年は637回、2017年は634回とほぼ同数である。日本各地のオペラ団体や劇場・音楽堂等の「国内団体」に関しては、2015年は240団体による991回だったのが、2016年は298団体による995回、2017年は218団体による968回となった。

教育研究団体は、2015年には、24団体による66回から、2016年が18団体による44回で大幅減となったのが、2017年には23団体による56回と、やや回復した。このカテゴリーは、大学や研修所等主催の、学生等の教育を主たる目的としたオペラ公演で、教育研究の成果発表の場である。学生に対する教育の過程においても重要な活動として、一定の機会確保が必須となっている。

海外団体は一時期、200回を超える公演が

記録されてきたが、2011年の東日本大震災をきっかけに激減して以来、減少したままの状況が続いている。2015年の来日団体は、9団体で上演回数は68回だったのが、2016年は7団体で61回、2017年は7団体で40回と、さらに減少した。

2-2. 国内団体公演【表3、表4-1、表4-2】

表3では、2017年に大規模会場で13回以上の公演を実施した国内団体の活動についてまとめた。これには各団体所属歌手が個別に主催して実施した団会員企画等は含めていない。

東京二期会は、2017年の総上演回数は24回と、前2016年の27回からは減少したものの、大規模な公演実施をする団体の中ではトップの回数を確保した。《トスカ》は、ダニエーレ・ルスティオーニ指揮により、東京文化会館での4回公演を実施。演出家の起用に特色があったのは、《蝶々夫人》のヴェテラン栗山昌良、読み替え演出によるアンドレアス・ホモキの《こうもり》各5回のプロダクション。それぞれ、ガエタノ・デスピノーサ、阪哲朗を指揮に迎えて音楽面を支えた。勅使川原三郎演出の《魔笛》は、若手の川瀬賢太郎の指揮により、神奈川県民ホールでの2回公演、iichiko 総合文化センター グランシアタで1回公演を行って合計3回公演。これは2016年に新制作公演したプロダクションで、既に愛知県芸術劇場で上演されたもの。さらに、共同制作公演となった《ばらの騎士》が、

東京文化会館で4回、セバスティアン・ヴァイグレの指揮する読売日本交響楽団で上演された。同プロダクションは、さらに、秋には愛知県芸術劇場で2回、加えてiichiko総合文化センター グランシアタで1回の公演が行われた。これら3回の公演には、ラルフ・ワイケルトを指揮に迎え、オーケストラ・ピットは名古屋フィルハーモニー交響楽団が務めた。合計7回公演。

日本オペラ振興会は、藤原歌劇団と日本オペラ協会の2団体を事業部に持つ組織で、イタリア・オペラを中心とする作品と日本オペ

ラ作品とをそれぞれ取り上げている。藤原歌劇団は、《カルメン》を4回、「川崎・しんゆり芸術祭 2017 Arte Ricca しんゆり」で《セビリャの理髪師》を2回、国内共同制作による《ノルマ》を5回上演。《カルメン》は、東京3回、愛知1回の合計4回公演を行い、多くの観客を集めた。《ノルマ》は、日生劇場での3回に加えて、新たに開場した川崎市スポーツ・文化総合センター [カルッツかわさき] で1回、びわ湖ホールで1回上演した。この他、《ルチア》を2回。この他、ジ・インベリアル・オペラとして團伊玖磨作曲の《夕鶴》

表3 2017年の国内団体公演活動データ*1

団体名	上演作品	A. 大規模会場		B. 中・小規模会場		合計
		上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
オペラシアターこんにゃく座	銀の口バ	4	66	55	165	231
	森は生きている	23		34		
	ネズミの涙	17		17		
	口はロボットの口	2		25		
	まげもん—MAGAIMON	17		4		
	想稿・銀河鉄道の夜	1		10		
	タングーまほうをかけられた舌ー	0		9		
	おぐりとててて	2		5		
	スマイルーいつの日か、ひまわりのように	0		6		
東京二期会	トスカ	4	24	0	0	24
	魔笛	3				
	ばらの騎士	7				
	蝶々夫人	5				
	こうもり	5				
日生劇場	ラ・ボエーム* ²	14	24	0	0	24
	ノルマ* ³	5				
	ルサルカ	5				
藤原歌劇団* ⁴	カルメン	4	13	0	1	21
	セビリャの理髪師	2		1		
	夕鶴	0		0		
	ノルマ* ³	5		0		
	ルチア	2		0		
日本オペラ協会	よさこい節	3	3	0	4	
	ミスター・シンデレラ	0		4		
びわ湖ホール	連隊の娘	2	13	0	0	13
	ラインの黄金	2				
	ノルマ* ³	5				
	ミカド* ⁵	4				
上位5団体合計上演回数／総上演回数		—	143/430	—	170/634	313/1064

*1 大規模会場で14回以上の上演をしている団体。大規模会場での総上演回数の合計順。共催公演、共同制作公演を含む。

*2 日生劇場は、《ラ・ボエーム》を、自劇場での10回のほかに、三重、滋賀、福岡、長崎で各1回公演している。

*3 《ノルマ》は、複数の劇場や団体による共同制作公演。藤原歌劇団、日生劇場とびわ湖ホールの各5回は同じプロダクション。

*4 藤原歌劇団と日本オペラ協会は、(公財)日本オペラ振興会内のオペラ団体。

*5 《ミカド》は、自劇場での2回のほかに、新国立劇場での共催公演として、2回公演している。

を1回、合計で14回の公演を実施した。

日本オペラ協会は、原嘉壽子作曲の《よさこい物語》を東京で2回、高知で1回の合計3回公演、郡愛子が新総監督に就任して《ミスター・シンデレラ》を4回上演した。

日生劇場は、「ニッセイ名作シリーズ2017」を実施、《ラ・ボエーム》を自らの劇場で8回（6月13日～23日）の後、三重（6月30日）、滋賀・びわ湖（7月13日）、長崎（9月8日）、北九州（9月13日）で合計12回公演した。これらは中学生や高校生を招待してのもので、各地で本格的なオペラ公演鑑賞の貴重な機会を提供している。同劇場は、同

じ演目を、「NISSAY OPERA 2017」として、一般向けにも2回公演（6月18日、24日）実施している。同じく「ニッセイ名作シリーズ2017」で《ルサルカ》を学校公演で2回、「NISSAY OPERA 2017」として一般公演3回の計5回公演を行った。同公演により、平成29年度（第72回）文化庁芸術祭賞優秀賞を受賞した。

びわ湖ホールは、2017年から「びわ湖ホールプロデュースオペラ」としてミヒャエル・ハンペ演出による「ニーベルングの指環」の上演を開始、芸術監督の沼尻竜典指揮により《ラインの黄金》を2回上演。「劇場・音楽堂

表4-1 2017年新国立劇場主催のオペラ公演（新国立劇場オペラパレスおよび中劇場：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
1月	カルメン	G.ビゼー	5	2016/2017 シーズンオペラ	全3幕/字幕付原語上演
2月	蝶々夫人	G.ブッチーニ	4	2016/2017 シーズンオペラ	全2幕/字幕付原語上演
3月	ルチア	G.ドニゼッティ	5	2016/2017 シーズンオペラ	新制作/全2部（3幕）/字幕付原語上演
4月	オテロ	G.ヴェルディ	5	2016/2017 シーズンオペラ	全4幕/字幕付原語上演
4月	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	4	2016/2017 シーズンオペラ	全4幕/字幕付原語上演
6月	楽劇「ニーベルングの指環」第2日ジークフリート	R.ワーグナー	6	2016/2017 シーズンオペラ	新制作/全3幕/字幕付原語上演 フィンランド国立歌劇場（ヘルシンキ）の協力による上演
7月	蝶々夫人	G.ブッチーニ	6	平成29年度 新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室	全2幕/字幕付原語上演
8月	ミカド	A.サリヴァン	2	平成29年度文化庁文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業 平成29年度 新国立劇場 地域招聘オペラ公演～びわ湖ホール～	全2幕/日本語・英語字幕付日本語上演 主催：滋賀県/滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール/新国立劇場
10月	楽劇「ニーベルングの指環」第3日神々の黄昏	R.ワーグナー	6	平成29年度（第72回）文化庁芸術祭オープニング・オペラ公演 2017/2018 シーズンオペラ 新国立劇場開場20周年記念公演	新制作/序幕付全3幕/字幕付原語上演 フィンランド国立歌劇場（ヘルシンキ）の協力による上演
11月	椿姫	G.ヴェルディ	5	平成29年度（第72回）文化庁芸術祭協賛公演 2017/2018 シーズンオペラ 新国立劇場開場20周年記念公演	全3幕/字幕付原語上演
11～12月	ばらの騎士	R.シュトラウス	4	平成29年度（第72回）文化庁芸術祭協賛公演 2017/2018 シーズンオペラ 新国立劇場開場20周年記念公演	全3幕/字幕付原語上演
—	10作品	8人	52/430	—	—

表4-2 2017年新国立劇場主催のオペラ公演（他会場での公演：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
10～11月	蝶々夫人	G. プッチーニ	2	平成29年度文化庁文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業 平成29年度 新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演	全2幕 / 字幕付原語上演 主催：京都市 / ロームシアター京都（（公財）京都市音楽芸術文化振興財団） / 新国立劇場 会場：ロームシアター京都
—	1作品	1人	2/430	—	—

等活性化事業（共同制作支援事業）」の公演助成を活用して、藤原歌劇団などと《ノルマ》を1回（共同制作プロジェクト全体では5回）。中ホールでは《連隊の娘》を2回、《ミカド》を2回（新国立劇場中劇場での上演をあわせると合計4回）公演。《連隊の娘》と《ミカド》は、びわ湖ホール声楽アンサンブルのメンバーを中心にキャスティングされた。

オペラシアターこんにゃく座は、例年200回を超える公演を実施している団体。2017年も231回を数えた。

表3には含まれないが、いくつか特色のある公演をあげておきたい。

公演制作の手法や演出家の起用等で目立ったのは、東京芸術劇場（（公財）東京都歴史文化財団）、（公財）金沢芸術創造財団などが全国共同制作した《蝶々夫人》と《トスカ》である。《蝶々夫人》は笈田ヨシが演出、《トスカ》は映画監督の河瀬直美が演出したことが話題となった。《蝶々夫人》は5回公演を、《トスカ》は6回公演を全国の劇場共同制作として実施している。比較的簡易な舞台セットで全国を巡回する方式が、劇場制作のオペラ公演に取り入れられた事例である。

関西では、劇場・音楽堂等による大規模な公演活動以外にも、オペラ団体主催の公演活動がしっかり行われている。

関西歌劇団の《白狐の湯》と《赤い陣羽織》は、尼崎市総合文化センターあましんアルカイックホール・オクトでの2回公演。この他、関西二期会がイタリアのリヴォルノ・ゴル

ドーニ歌劇場と共同制作したマスカーニ《イリス》を2回、演出にドイツを拠点に活動する若手の菅尾友を起用した《魔弾の射手》を2回、堺シティオペラが《ラ・ボエーム》を2回上演した。

愛知では名古屋二期会による《椿姫》がヴェテランの平尾力哉による演出舞台に、若手の角田鋼亮を指揮に、さらに若手歌手を起用しての公演を2回実施した。

さらに、東京オペラ・プロデュースは、レスピーギ作曲《ベルファゴール》とオッフェンバック作曲の《ラインの妖精》をそれぞれ2回ずつ日本初演した。同団体がこれまでも複数回にわたって上演してきた《ビバ！ラ・マンマ》の2回公演も行っている。

新国立劇場の主催公演は、新制作が3つ。3月には《ルチア》を5回上演した。これは、モンテカルロ歌劇場との共同制作で、新国立劇場で制作して舞台初演し、その後モンテカルロに持っていくという方法がとられた。6月に楽劇「ニーベルングの指環・第2日」《ジークフリート》を6回、さらに2017/2018シーズンのオープニングとして、10月に楽劇「ニーベルングの指環・第3日」《神々の黄昏》を6回上演して、飯守オペラ監督による「指環上演」を完結した。この《ジークフリート》と《神々の黄昏》は、故ゲッツ・フリードリヒの演出によるフィンランド国立歌劇場のプロダクションで、それぞれ上演実績のあるもの。

劇場外公演は、「高校生のためのオペラ鑑

表5 2017年の教育研究団体公演活動データ*1

団体名	作品名	作曲家名	A. 大規模会場		B. 中・小規模会場		合計
			上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
新国立劇場 オペラ研修所	コジ・ファン・トゥッテ	W.A. モーツァルト	3	3	0	3	6
	ドン・ジョヴァンニ	G. ガッザニーガ	0		3		
焼津中央高等学校 合唱部	魔笛	W.A. モーツァルト	4	4	0	0	4
国立音楽大学	フィガロの結婚	W.A. モーツァルト	2	2	0	0	2
昭和音楽大学	ドン・ジョヴァンニ	W.A. モーツァルト	2	2	0	0	2
洗足学園音楽大学・ 大学院	カルメン	G. ビゼー	2	2	0	0	2
東京音楽大学	ラ・ボエーム	G. ブッチーニ	2	2	0	0	2
東京藝術大学	フィガロの結婚	W.A. モーツァルト	2	2	0	0	2
7団体合計上演回数 ／総上演回数	6作品	4人	—	17/430	—	3/634	20/1064

*1 大規模会場で、教育研究型公演の開催実績が2回以上ある団体。合計および50音順の掲載。学生主催公演やゼミ単位の公演、有志による公演などは含まない。

賞教室・関西公演」として、『蝶々夫人』を2回公演。高関健指揮、京都市交響楽団のオーケストラ・ピットでの演奏により、ロームシァター京都で行われた。

2-3. 教育研究団体公演【表5】

教育研究団体の公演は、2017年は56回。2016年の44回から増加した。各地の芸術系大学、劇場やオペラ団体が運営する研修所等による教育成果披露の機会であり、定期的に行われている。例年通り、教育研究団体公演で上げられる作品は、学生や卒業生等の若い歌手たちが出演することもある。モーツァルトのオペラ作品上演が多い。各芸術系大学の施設内では、修了公演や大学主催の大規模な公演以外に学生や教員主催の大小規模の公演が行われていることもある。大学そのものが、それぞれ一つの劇場のような様相を呈している。

2-4. 海外団体公演【表6、図3】

海外団体公演は、2015年に行われた9団体の公演68回、2016年が7団体による61回公演、2017年は7団体による40回公演と一層の減少傾向にある。

大規模な歌劇場による上演形態である「拠

点型」公演（4都市以下での公演）は、2017年にはバイエルン州立歌劇場の1つ。キリル・ペトレンコの指揮、ロメオ・カステルッチ演出による『タンホイザー』と、アッシャー・フィッシュ指揮、アウグスト・エヴァーディング演出の『魔笛』が取り上げられた。

「巡回型」公演（5都市以上での公演）は、イタリアのパレルモ・マッシモ劇場が、全国5都市で『トスカ』と『椿姫』を合計8回とりあげた。これまでは東欧系の歌劇場来日公演に典型的だった、名作オペラで日本全国を公演して回る興行形態が、イタリアの歌劇場にも広がったことが見て取れる。ハンガリー国立歌劇場は、全国14都市で、17回の公演を実施。

この他、特徴のある公演も行われた。韓国の大邱オペラハウスによる『ラ・ボエーム』公演1回は、広島市との大邱広域市との姉妹都市提携20周年記念として行われたもの。プロダクションをはじめ、衣装や道具、ソリスト、指揮者、合唱団（一部を除く）等は、大邱オペラハウスのもの。オーケストラ・ピットには広島交響楽団が入り、パンダや児童合唱も地元広島の人材が起用されたものの、大邱オペラハウスの来日公演と言える規模での上演だったため、海外団体に分類した。ボロー

表6 2017年海外団体^{*1}の公演活動データ (A.大規模会場)

形態*2	上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/ 総上演回数	開催都市数
その他	5月	韓国	大邱オペラハウス	ラ・ボエーム	G. ブッチーニ	1	1	1
巡回	6月	イタリア	パレルモ・マッシモ劇場	トスカ	G. ブッチーニ	4	8	3
				椿姫	G. ヴェルディ	4		3
その他	7月	中国	江蘇省演芸集団	鑑真東征	唐 建平	4	4	2
拠点	9月	ドイツ	バイエルン国立歌劇場	タンホイザー	R. ワーグナー	3	7	1
				魔笛	W.A. モーツァルト	4		1
その他	9月	イタリア	ボローニャ歌劇場管弦楽団	椿姫	G. ヴェルディ	2	2	1
その他	10月	ベルギー	ラ・プティット・バンド	ラ・カンテリーナ	J. ハイドン	1	1	1
巡回	10~11月	ハンガリー	ハンガリー国立歌劇場	こうもり	J. シュトラウスⅡ世	11	17	10
				ランメルモールのルチア	G. ドニゼッティ	6		5
—		6ヶ国	7団体	9作品	8人	40	40/1064	17都市

*1 劇場名は、主催者表記に準じる。

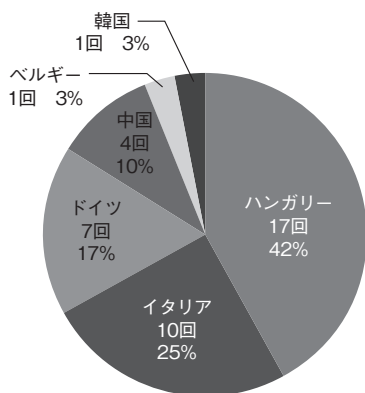
*2 形態の分類手法は以下のとおり。

「拠点型」：1回の来日で、4都市以下での公演を行う歌劇場公演。東京23区とそれ以外の東京都内の市は分け、各1都市として区別する。
例：東京文化会館、武蔵野市民文化会館、府中の森芸術劇場での開催の場合、異なる3都市での開催とカウントする。

「巡回型」：1回の来日で、5都市以上で公演を行う歌劇場公演。

「その他」：音楽祭、合唱団などの芸術団体、実行委員会やプロジェクト等による公演。

図3 2017年海外団体の公演（全40回）・所属国別割合



ニャ歌劇場管弦楽団《椿姫》も、完全な引越公演とは言えないものの、オーケストラ、主要ソリスト、合唱団（一部）が来日しての公演2回を海外団体とした。この他、シギスヴァルト・クイケン指揮によるラ・プティット・バンドの《ラ・カンテリーナ》が新・福岡古楽音楽祭で1回行われている。

2017年も、海外団体による公演は全国17都市の比較的大規模な会場で行われていて、引き続き各地域での一定のニーズを示している。

3. 指揮者と演出家

（指揮者）

2017年に登場した指揮者は、国内外あわせて205人。ここでは、大規模な会場で登場した指揮者を中心にとりあげてみたい。

2017年、大規模会場での公演を振って最も回数の多かった指揮者は園田隆一郎で、合計28回である。日生劇場の《ラ・ボエーム》を14回、びわ湖ホール《ミカド》4回と《連隊の娘》を2回が主なもの。この他、市民オペラの指導にも実績を積んでおり、芸術監督を務める藤沢市民オペラ《トスカ》を4回、三河市民オペラの《イル・トロヴァトーレ》を2回振っていて、東京藝術大学の《フィガロの結婚》2回も指揮した。

次は、飯守泰次郎が12回。新国立劇場の「ニーベルングの指環」《ジークフリート》6回、《神々の黄昏》6回による。佐渡裕が《フィガロの結婚》で10回となった。この2人は、各劇場の芸術監督の任にある。この他、オーケストラのみならず、合唱指揮を得意とする山田和樹がオペラ公演に取り組んで成果をあげた。藤原歌劇団の《カルメン》を4回、日生劇場の《ルサルカ》を5回の合計9回振った。

海外の指揮者は、いずれもプロダクション
ごとの起用となったため、数字の上で目立っ
た者はいない。

「巡回型」公演ではアーツカンパニー公演
で佐々木克仁が《カルメン》《泣いた赤鬼》
《ヘンゼルとグレーテル》《こうもり》を大規
模会場で12回、中・小規模会場で20回振っ
ている。

例年、多くの回数を重ねる海外歌劇場の
「巡回型」公演では、ハンガリー国立歌劇場
公演では3人の指揮者が、パレルモ・マッシ
モ歌劇場公演では2人の指揮者が分担したた
め、突出した数字となった指揮者はいなかつ
た。

(演出家)

2017年、186の演出家およびグループが記
録された。この数字には再演出家は含めて
いない。

大規模会場での演出回数の点では、栗國淳
が17回となったことが目立つ。藤原歌劇団他
の《ノルマ》5回、堺シティオペラ《ラ・ボ
エーム》2回、新国立劇場研修所の《コジ・
ファン・トゥッテ》3回、藤沢市民オペラ《ト
スカ》を4回等、全国各地の大規模会場で複
数の演出上演を行ったことによる。

岩田達宗が、大規模会場で15回、中・小規
模会場で5回の合計20回の舞台を演出して
いる。藤原歌劇団《カルメン》4回、《ルチア》
2回、日本オペラ協会の《よさこい節》3回、
ひろしまオペラルネッサンス《コジ・ファ
ン・トゥッテ》2回等の演出が目立つ。また、
《カルメン》では山田和樹、《コジ・ファン・
トゥッテ》では川瀬賢太郎、《よさこい節》で
は田中祐子の若手3人の指揮者と、《ルチア》
ではヴェテランの菊池彦典という日本人指揮
者達との協働による舞台となったことも特徴
である。

中村敬一が大規模会場で12回、中・小規
模会場で19回の合計31回演出した。びわ湖
ホール《連隊の娘》《ミカド》、熊本シティオ
ペラ協会の《椿姫》《笛姫》等に関わった。

この他、オペラシアターこんにゃく座
の「巡回型」公演を中心とした演出で、鄭
義信が《ネズミの涙》34回、《まげもんー
MAGAIMON》21回、《ロはロボットのロ》
27回で、合計82回公演となった。同団所属
の大石哲史が《森は生きている》57回、《想
稿・銀河鉄道の夜》11回の演出などで合計
80回となっている。

表7 2017年 オペラ作品、作曲家別の上演回数

	海外の作品			日本の作品			合計		
	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	総上演回数
2004年	49人	99作品	753回	43人	61作品	414回	92人	160作品	1167回
2005年	57人	111作品	826回	50人	60作品	376回	107人	171作品	1202回
2006年	47人	100作品	800回	50人	71作品	424回	97人	171作品	1224回
2007年	55人	105作品	721回	41(46)人	59作品	352回	96(101)人	164作品	1073回
2008年	50(51)人	107作品	782回	51(52)人	70作品	437回	101(103)人	177作品	1219回
2009年	49(50)人	99作品	653回	48(49)人	48作品	335回	97(99)人	147作品	988回
2010年	42(44)人	86作品	654回	41人	59作品	516回	83(85)人	145作品	1170回
2011年	38人	88作品	530回	34(36)人	51作品	373回	72(74)人	139作品	903回
2012年	51(52)人	97作品	636回	55(56)人	75作品	481回	106(108)人	172作品	1117回
2013年	41(45)人	99作品	675回	56(59)人	83作品	464回	97(104)人	184作品	1139回
2014年	44人	87作品	607回	50(52)人	84作品	454回	94(96)人	171作品	1061回
2015年	44(45)人	89作品	690回	58(61)人	84作品	435回	102(106)人	173作品	1125回
2016年	51(53)人	99作品	669回	52人	86作品	431回	103(105)人	185作品	1100回
2017年	41人	86作品	606回	54人	83作品	458回	95人	169作品	1064回

* () 内は、共作者・編曲者等を入れた場合の数字。

4. オペラ作品と作曲家【表7】

2017年は海外のオペラ作品上演は607回となり、2016年の669回と比べると大幅に数字を減らした。作品数も、2016年には99作品から86作品へと減少している。日本のオペラ作品の上演回数は、2012年以降微減傾向が続いていたが、2016年の431回から2017年は458回と若干増えた。日本のオペラ作品は、2017年は83作品で、2016年の86作品とほぼ変わらない。

4-1. 海外のオペラ作品と作曲家【表8-1、表8-2】

2017年は《カルメン》が54回で、総上演

回数では1位になった。新国立劇場、藤原歌劇団、小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXVなどが大規模な会場で公演を重ねた他、各地域のオペラ団体が大小規模の会場で取り上げたことも要因である。

《こうもり》は、東京二期会が5回、ハンガリー国立歌劇場の「巡回型」公演で11回のほか、各地の大小様々な組織が上演したことによる。《椿姫》は、新国立劇場が5回のほか、名古屋二期会が2回、「巡回型」公演でパレルモ・マッシモ劇場が4回取り上げている。《フィガロの結婚》は、兵庫県立芸術文化センターが10回、新国立劇場が4回のほか、芸術

表8-1 2017年に日本で上演された海外のオペラ作品

(大規模会場での上演実績のあるもの、全85作品中・上位15作品、タイトルは便宜的に統一)

No.	作品名	作曲家名	A. 大規模会場	B. 中・小規模会場	合計
1	カルメン	G. ビゼー	25	29	54
2	こうもり	J. シュトラウスⅡ	27	14	41
3	椿姫	G. ヴェルディ	19	16	35
4	フィガロの結婚	W.A. モーツァルト	24	9	33
4	魔笛	W.A. モーツァルト	17	16	33
6	蝶々夫人	G. プッチーニ	27	5	32
7	ラ・ボエーム	G. プッチーニ	22	7	29
8	トスカ	G. プッチーニ	19	6	25
8	コジ・ファン・トゥッテ	W.A. モーツァルト	7	18	25
10	ランメルモールのルチア	G. ドニゼッティ	13	3	16
11	愛の妙薬	G. ドニゼッティ	4	9	13
11	天国と地獄	J. オッフェンバック	0	13	13
13	ヘンゼルとグレーテル	E. フンパーディンク	2	10	12
13	小鳥売り	H. ツェラー	1	11	12
15	ばらの騎士	R. シュトラウス	11	0	11
合計/ 総上演回数	—	—	218/430	166/634	384/1064

表8-2 2017年に日本で上演された海外の作曲家 (全41人中、上位10人)

No.	作曲家名	上演回数
1	G. プッチーニ	110
2	W.A. モーツァルト	102
3	G. ヴェルディ	59
4	G. ビゼー	56
5	J. シュトラウスⅡ世	41
6	G. ドニゼッティ	39
7	J. オッフェンバック	20
8	G.C. メノッティ	18
9	R. ワグナー	17
9	P. マスカーニ	17
合計/ 総上演回数	—	479/1064

系大学の公演などが目立つ動きだった。

モーツァルト、プッチーニ、ヴェルディが上位を占めるのも例年同様の傾向で、2017年はプッチーニが110回でトップだった。

新しい作品の上演は、レスピーギ作曲の《ベルファゴール》とオッフェンバック作曲の《ラインの妖精》の2作品が東京オペラ・プロデュースによる。

4-2. 日本のオペラ作品と作曲家【表9-1、表9-2】

「巡回型」公演を全国で展開しているオペラシアターこんにゃく座やオペレッタ劇団ともしびによる上演が上位を占めた。この他には、池辺晋一郎の《てかがみ》がミラマーレ・オペラにより巡回公演された。

新しい日本のオペラ作品もいくつか。夏目漱石生誕150年記念・国際共同制作として、東京文化会館主催により長田原^{おさだもと}作曲の《Four Nights of Dream》が2回上演された。これに先立ち、ニューヨークのジャパン・ソサエティーとの間での国際共同制作として、2017年9月にニューヨークで上演されている。他

には、熊本シティオペラ協会30周年記念公演として、樹原孝之介作曲の《笛姫》が1回、三枝成彰作曲の《狂おしき真夏の一日》が4回、吉川和夫作曲の《むくどりのゆめ》合唱童話版が1回、それぞれ大規模会場で、萩京子作曲の《タンゲーまほうをかけられた舌》8回等が中・小規模会場で初演されるなどの実績が記録された。この他にもいくつかの作品が創作初演された。海外での初演作品もある。細川俊夫作曲《二人静—海から来た少女—》がパリとケルンで各1回、演奏会形式で世界初演された。

5. 上演地域の分布と会場別データ

【表10、表11、図4、表12】

オペラ公演開催が確認できなかった県の有無が、毎年の関心の一つとなる。2016年は全都道府県でのオペラ公演開催が確認されたが、2017年は福井県と徳島県で全幕のオペラ公演が確認できなかった。

2017年は、首都圏の東京、神奈川、愛知が1～3位に入ったことは2016年と全く変わら

表9-1 2017年に国内で上演された日本のオペラ作品（A.大規模会場） *大規模会場で、上演回数10回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	森は生きている	林 光	23	2	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で35回公演あり
2	ネズミの涙	萩 京子	17	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で17回公演あり
3	まげもん—MAGAEMON	萩 京子	17	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で4回公演あり
合計/総上演回数			57/430	—	—	—

表9-2 2017年に国内で上演された日本のオペラ作品（B.中・小規模会場）

*中・小規模会場で、上演回数20回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	銀の口バ	萩 京子	55	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で4回公演あり
2	トラの恩返し	李 在浩	40	1	オペレッタ劇団ともしび	
3	森は生きている	林 光	35	1	オペラシアターこんにゃく座/サランカホール	大規模会場で23回公演あり
4	口はロボットの口	萩 京子	25	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模開場で2回公演あり
合計/総上演回数			155/634	—	—	—

表10 2017年の都道府県別上演回数

No.	都道府県名	国内団体		教育研究団体		海外団体		合計		
		団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	上演回数 順位
1	北海道	6	19	0	0	0	0	6	19	13
2	青森	3	5	0	0	0	0	3	5	32
3	岩手	4	9	0	0	1	1	5	10	20
4	宮城	4	29	0	0	0	0	4	29	7
5	秋田	2	9	0	0	0	0	2	9	23
6	山形	4	9	1	1	0	0	5	10	20
7	福島	5	23	0	0	0	0	5	23	12
8	茨城	5	13	0	0	1	1	6	14	17
9	栃木	6	11	1	5	0	0	7	16	14
10	群馬	5	7	0	0	1	1	6	8	24
11	埼玉	17	45	1	1	1	1	19	47	5
12	千葉	8	29	0	0	0	0	8	29	7
13	東京	107	348	7	23	4	19	118	390	1
14	神奈川	19	69	3	6	1	1	23	76	2
15	新潟	2	2	0	0	1	1	3	3	38
16	富山	3	4	0	0	0	0	3	4	35
17	石川	5	6	0	0	1	1	6	7	26
18	福井	0	0	0	0	0	0	0	0	—
19	山梨	4	5	0	0	0	0	4	5	32
20	長野	11	25	0	0	0	0	11	25	10
21	岐阜	4	11	0	0	0	0	4	11	18
22	静岡	6	39	1	4	2	3	9	46	6
23	愛知	15	49	3	7	2	2	20	58	3
24	三重	2	2	0	0	1	1	3	3	38
25	滋賀	5	10	0	0	1	1	6	11	18
26	京都	9	22	2	3	0	0	11	25	10
27	大阪	10	20	2	4	3	4	15	28	9
28	兵庫	17	47	1	2	0	0	18	49	4
29	奈良	1	2	0	0	0	0	1	2	40
30	和歌山	3	5	0	0	0	0	3	5	32
31	鳥取	2	2	0	0	0	0	2	2	40
32	島根	3	4	0	0	0	0	3	4	35
33	岡山	2	6	0	0	0	0	2	6	28
34	広島	6	15	0	0	1	1	7	16	14
35	山口	1	4	0	0	0	0	1	4	35
36	徳島	0	0	0	0	0	0	0	0	—
37	香川	4	7	0	0	0	0	4	7	26
38	愛媛	2	2	0	0	0	0	2	2	40
39	高知	2	2	0	0	0	0	2	2	40
40	福岡	4	13	0	0	2	2	6	15	16
41	佐賀	2	2	0	0	0	0	2	2	40
42	長崎	1	1	0	0	0	0	1	1	45
43	熊本	4	8	0	0	0	0	4	8	24
44	大分	5	6	0	0	0	0	5	6	28
45	宮崎	3	6	0	0	0	0	3	6	28
46	鹿児島	4	10	0	0	0	0	4	10	20
47	沖縄	3	6	0	0	0	0	3	6	28
合計	—	—	968	—	56	—	40	—	1064	—

表 11 2017年の都道府県別・地域別、公演会場規模別分布

都道府県名	A. 大規模会場		B. 中・小規模会場		会場数比率	上演回数比率	地域
	会場数	上演回数	会場数	上演回数	会場数	総上演回数	
北海道	1	1	12	18	16.06%	9.87%	北海道・東北
青森	2	2	3	3			
岩手	3	3	6	7			
宮城	1	2	24	27			
秋田	1	1	8	8			
山形	2	3	6	7			
福島	9	17	6	6	43.98%	54.51%	関東
地域合計	19	29	65	76			
茨城	3	5	9	9			
栃木	5	6	5	10			
群馬	3	3	5	5			
埼玉	10	12	20	35			
千葉	0	0	16	29	16.63%	14.94%	中部・甲信越
東京	26	170	89	220			
神奈川	14	26	25	50			
地域合計	61	222	169	358			
新潟	2	3	0	0			
富山	2	2	2	2			
石川	1	3	3	4	11.09%	11.56%	関西
福井	0	0	0	0			
山梨	1	3	2	2			
長野	3	8	12	17			
岐阜	0	0	8	11			
静岡	12	34	9	12			
愛知	7	17	23	41	5.16%	4.04%	中国・四国
地域合計	28	70	59	89			
三重	1	2	1	1			
滋賀	2	10	1	1			
京都	3	7	10	18			
大阪	11	17	8	11			
兵庫	6	22	9	27	7.07%	5.08%	九州・沖縄
奈良	0	0	1	2			
和歌山	1	1	4	4			
地域合計	24	59	34	64			
鳥取	1	1	1	1			
島根	1	2	2	2			
岡山	2	2	4	4	5.08%	5.08%	九州・沖縄
広島	2	10	5	6			
山口	0	0	1	4			
徳島	0	0	0	0			
香川	2	3	2	4			
愛媛	1	1	1	1			
高知	1	1	1	1	7.07%	5.08%	九州・沖縄
地域合計	10	20	17	23			
福岡	3	10	4	5			
佐賀	2	2	0	0			
長崎	1	1	0	0			
熊本	1	3	4	5			
大分	2	3	3	3			
宮崎	2	3	3	3	5.08%	5.08%	九州・沖縄
鹿児島	2	6	4	4			
沖縄	2	2	4	4			
地域合計	15	30	22	24			
合計	157	430	366	634	523	1064	—

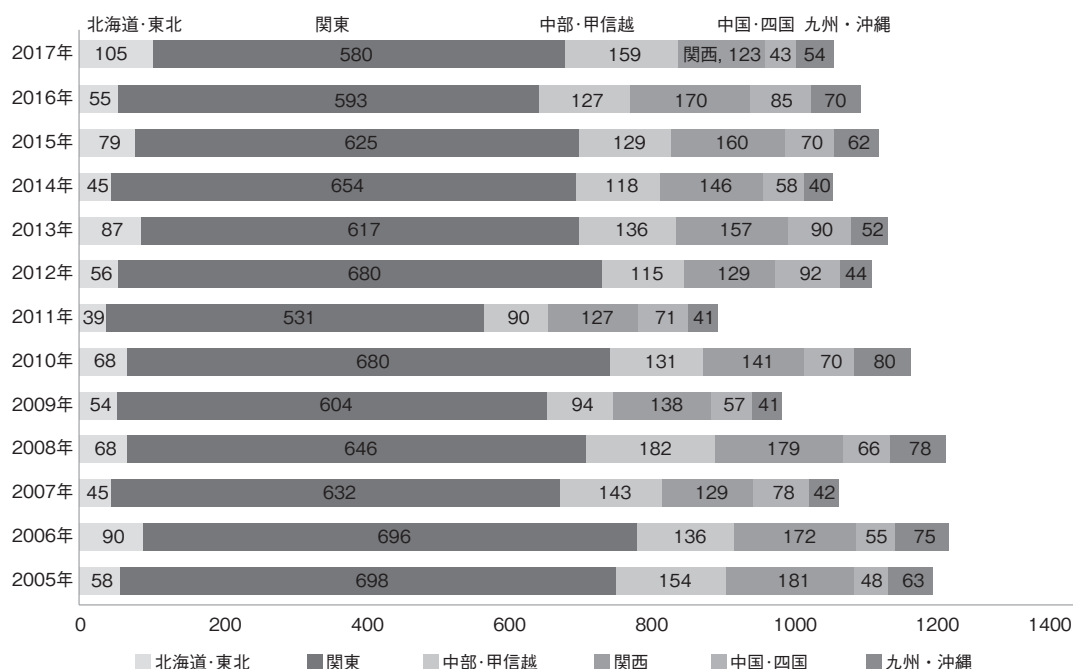
同一館内の複数の会場、同一大学内の複数の会場は、規模別に1カ所とした。

例：新国立劇場オペラ劇場、新国立劇場中劇場は大規模会場で1カ所。

新国立劇場小劇場は中・小規模会場で1カ所。

地域合計の上位3位までに背景色を付した。

図4 地域別総上演回数推移（単位・回）



なかった。兵庫、埼玉、静岡と続いたところが2016年との違いである。他には、宮城、千葉、大阪、長野、京都が10位までに入った。

東京は、2017年は390回で、2016年の394回とほぼ同数、依然として他を引き離しているものの、2015年の424回から大きく数を減らしたままである。国内団体による公演は、2015年が376回だったのが、2016年は348回、2017年は348回と変わらなかったことが要因である。海外団体の上演回数は2015年が26回だったのが2016年は29回、2017年は19回に減少している。教育研究団体は2015年が22回だったのが2016年は17回、2017年は23回と微増した。

この他、宮城県は大幅に順位を伸ばしたが、仙台オペラ協会の2回公演以外は、オペラシアターこんにゃく座13回、オペレッタ劇団ともしび11回、ミラマーレ・オペラ3回の各巡回型団体による生徒を対象とした公演だった。回数が増えているといっても、必ず

しも一般に広く鑑賞機会が確保されているわけではないというケースである。

表11では、今回から各都道府県でオペラ公演が実施された会場数を数値として取り上げることにした。大規模会場での公演、中・小規模会場での公演別の実施状況が一覧できるようになっている。1公演も確認されなかった福井県、徳島県以外にも、千葉県、岐阜県、奈良県、山口県で大規模な全幕上演が行われていないことが見て取れる。しかし、各県ともに演奏会形式等でのオペラ上演はいくつか記録されている。福井県では、《ラ・ボエーム》が、ハーモニーホールふくいでハイライト上演されており、千葉県でも《カルメン》のハイライト上演等が複数回実施されるなど、各地域での重要な鑑賞機会となった。

表12の会場別総上演回数を見てみよう。新国立劇場は、2013年には79回、さらに2014年には84回と増加していたのが、2015年には75回に、2016年にはさらに65回に減少、

表12 2017年の会場別総上演回数（A.大規模会場で8回以上開催の会場。〔 〕内は同一施設内のB.中・小規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	総上演回数	客席数 ^{*2} (席)	総客席数(席) ^{*3}
1	東京都	新国立劇場オペラ劇場	50	0	0	50	65	1,814	106,270 [109,546]
		新国立劇場中劇場	12	3	0	15		1,038	
		新国立劇場小劇場	[4]	[3]	0	[7]		[468]	
2	東京都	東京文化会館 大ホール	20	0	9	29	29	2,303	66,787
		東京文化会館 小ホール	[4]	0	0	[4]	[4]	[649]	[69,383]
3	東京都	日生劇場	24	0	0	24	24	1,330	31,920
4	兵庫県	兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール	10	0	0	10	10	2,001	20,010 [20,844]
		兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院 小ホール	[2]	0	0	[2]	[2]	[417]	
5	広島県	JMSアステールプラザ大ホール	8	0	1	9	9	1,204	10,836 [11,284]
		JMSアステールプラザ 多目的スタジオ	[2]	0	0	[2]	[2]	[224]	
6	滋賀県	滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール大ホール	4	0	1	5	9	1,848	12,456
		滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール中ホール	4	0	0	4		804	
7	愛知県	愛知県芸術劇場大ホール	6	0	2	8	8	2,500	20,000
		愛知県芸術劇場小ホール	[2]	0	0	[2]	[2]	[282]	[20,564]
7	静岡県	アクトシティ浜松大ホール	7	0	1	8	8	2,336	18,688
9	福島県	郡山市民文化センター中ホール	6	0	0	6	6	806	4,836
9	東京都	Bunkamura オーチャード ホール	2	0	4	6	6	2,150	12,900
9	静岡県	磐田市民文化会館	6	0	0	6	6	1,500	9,000
9	兵庫県	尼崎市総合文化センター あましんアルカイックホール	2	0	0	2	6	1,820	6,856
		尼崎市総合文化センター あまし んアルカイックホール・オクト	4			4		804	
合計/総上演回数 客席数・総客席数			165 [14]	3 [3]	18	186 [17]	186[203] ^{*1} /1064	24,258 [2,040]	320,559 [328,277]

*1 大規模会場の総上演回数は、併設する中・小規模会場の上演回数を含めた数字を〔 〕内に表した。

*2 各会場の1回あたりの客席数は、オーケストラピット設営の有無、会場の使用形式にかかわらず、最大値とした。

例：新国立劇場中劇場1038席/回

*3 大規模会場の客席数は、併設する中・小規模会場の客席数を含めた数字を〔 〕内に表した。

2017年は52回（関西公演を入れると54回）と減少した。2017年は《ルチア》、《ジークフリート》《神々の黄昏》等の大型新制作が続いたことも影響したのだろうか。一方で、東京文化会館は、2016年の43回から、2017年は33回へと減少、日生劇場は21回から24回へと増加、兵庫県立芸術文化センターは、2016年の11回から、2017年は12回とほぼ横ばいとなった。このほかの劇場としては、JMSアステールプラザが11回、びわ湖ホールが9回など上位を占めた。

表12に、各ホールの座席数（ピット設置

等による客席減は考えず最大の値とした）に公演回数を掛けて合計し、実際の入場者数ではないものの、1回あたりに鑑賞可能な数を積算している。表中の上位8か所の大規模および中・小規模会場の客席数を合計すると、33万席近い数が提供されたことになる。これに、実際の入場者数、使用した舞台形状による客席数の減少などを勘案して実数を出す必要はあるものの、おおよその目安にはなる。

6. 演奏会形式など

この他、C表に分類された公演、すなわち

演奏会形式・コンサート形式での上演の他、部分的にカットして上演されたもの等の記録を見てみよう。2015年には339回、2016年には359回、そして2017年には302回が記録されている。この中でいくつかの点で重要と考えられるものを取り上げてみたい。

(オーケストラ主催の演奏会形式上演)

「オーケストラの定期演奏会」を見てみよう。

まず大きな足跡を残したのは、読売日本交響楽団とシルヴァン・カンブルラン指揮による、《アッシジの聖フランチェスコ》の演奏会形式全曲日本初演である。読売日本交響楽団の第9代常任指揮者として、3期9年にわたった任期を2018年度に終えるカンブルランが、びわ湖ホールでの1回公演をはさんで、サントリーホールで2回公演の合計3回の指揮をした。

ピエタリ・インキネン指揮の日本フィルハーモニー交響楽団による《ラインの黄金》2回の公演は、東京文化会館を会場として、照明演出を効果的に取り入れたこと等もあって、まとまりのある上演となった。パヴォ・ヤルヴィ指揮のNHK交響楽団が《ドン・ジョヴァンニ》を1回演奏している。

アマチュア団体の活動ながら、愛知祝祭管弦楽団が「ニーベルングの指環」上演に取り組み始め、二年目となる2017年には《ワルキューレ》を演奏会形式で取り上げて話題となった。

(音楽祭や劇場・音楽堂等主催の演奏会形式上演)

東京・春・音楽祭が、マレク・ヤノフスキ

指揮 NHK 交響楽団による演奏で《神々の黄昏》を2回とりあげて、「指環」の上演を完成させた。北とぴあ国際音楽祭は、寺神戸亮指揮、レ・ボレアードの演奏で《オルフェオとエウリディーチェ》を2回上演。

ミューザ川崎は《ドン・ジョヴァンニ》を1回上演した。毎年、自主制作でオペラ公演を行っているいずみホールは、《愛の妙薬》を1回取り上げた。びわ湖ホールは《森は生きている》の抜粋版を県内8ヵ所で巡回公演している。

7. まとめ

国内団体の共同制作公演、巡回型公演など、団体や劇場・音楽堂等間の連携が継続して行われて、制作体制の多様性を増す一方で、海外団体公演は回数の上で元気がない。いまなお、鑑賞機会の提供に一定の役割を果たしているとはいえ、2017年は数の上では落ち込んだままだ。

人材面では、国内の若手指揮者、若手演出家が上演に関わる機会が増えているように感じられる中、ヴェテランもまだまだ元気だ。

日本のオペラ界は、世代交代の波に洗われ、さらに公演制作の方式や主体も変化してきている。オペラ制作の構造が変わっていく過渡期なのではないかと数字からも感じられる2017年であった。

(本稿のデータ分析後に判明した公演記録があるため、巻末の公演記録と若干の相異点があることをお断り致します。)